

## 自由遊び場面における幼児の社会的発達の測定の試み

筑波大学大学院(博)心理学研究科 小林 真

筑波大学心理学系 丹羽 洋子

Assessment of young children's social development in free play situations

Makoto Kobayashi and Yoko Niwa (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

Previous studies indicated that solitary play decreases with age, and that parallel play and group play increase with age. So children's social development can be assessed by observing their play behavior. In this study, young children's free play behaviors were observed in the classroom and playground in a nursery school to examine age difference and sex difference. Children's behaviors were coded using the play observation scale. This scale was developed by Rubin (1986) based on social- and cognitive- development theories. The result indicated that older children prefer group physical play and group constructive play. Onlooker behaviors were more observed in younger children than older children. Additionally, sex difference was found in frequency of parallel play (i.e. girls were more engaged in parallel play than boys). Finally, the play observation scale was used to assess children's social development.

**Key words:** social development, play behaviors, assertion, cooperation.

### 問題と目的

Ladd, Price & Hart(1988)は、学年の初めの時点で遊びの観察とソシオメトリーの測定を行い、年度末の遊びおよびソシオメトリーの関連性を検討した。その結果、年度当初の遊びのパターンから年度末のソシオメトリー地位を予測することは可能であるが、年度当初のソシオメトリーから年度末の遊びを予測することはできなかった。すなわち、遊び場面での行動が、後の仲間関係を構築していく基盤となるのである。

本研究は、主張性・協調性による社会的行動類型と実際の遊び活動の関連性を研究するための予備的研究として、まず社会的遊びの発達的特徴を明らかにすることを目的とする。主張性・協調性と対人行動の関連性については、小林(1992)および小林(1993)に報告されている。その結果、主張性・協調性と対人行動の間に特徴的な関連性がみられた。しかし、こうした対人行動のパターンが自由遊び場面

での様々な活動とどのように結びついているのかについては、まだ十分に明らかにされていない。

自由遊び場面における行動観察によって社会的スキルを測定する場合に、インタラクションの頻度そのものは有効な手がかりとはならない。Gottman(1977)は、孤立児の指標として用いられてきたインタラクション頻度の少なさは、ソシオメトリー地位の低さとは別個のもので、仲間からの受容度を必ずしも反映してはいないことを報告している。孤立した子どもは、むしろ仲間集団の遊びに参加することができないため、他児の周辺をうろろする行動(hovering)が多く、ホバリングの頻度の方が社会的スキルや仲間関係に結びつく有効な測度であるといえる。

Rubin(1982)は、Parten(1932)の遊びにおける社会的参加度のカテゴリーに、認知発達の観点を加えたカテゴリーを用い、幼児の遊びの観察とソシオメトリックテストを行っている。その結果、独り遊びの中でも、構成的な遊びや劇的な遊びは社会的な

リスクが小さく、独り—機能的遊びや平行—機能的遊びの頻度の高さがむしろ仲間関係におけるリスクを反映していると述べている。さらにRubin(1986)は、社会的地位の高い子どもの独り遊びは構成的遊びが多いのに対して、社会的地位の低い子どもの独り遊びは、劇的遊び(一人で何かの振りをする)が多いと述べている。したがって、幼児期の社会的な遊びとは何か、遊び活動はどのように発達していくのかを把握することは、幼児の社会的スキルがもたらす成果を知る上で重要である。

小林(1990)は、幼児期の社会的な発達課題は、仲間関係を構築していくことであると述べている。仲間との協同遊びができることは、良好な仲間関係が構築され、集団に適応できていることの指標となる。逆に、独り遊びや平行遊びの段階で、しかも無目的な身体活動の反復が多い場合には、遊びにエンターシーしたり、仲間集団の中で協同遊びを維持するスキルに欠け、仲間から拒否されたり無視されたりしやすい。

そこで本研究では、Rubin(1986)の観察カテゴリーをもとに、遊びにおける社会的発達を検討する。Rubin, Maioni & Hornung(1976), Rubin, Watson & Jombor(1978)の観察研究において、遊びにみられる社会的参加度と認知的活動には、年齢差と社会階層による差が見出されている。また、社会的行動や遊び活動には性差が存在することもすでに指摘されている(Zehng & Colombo, 1988)。本研究では、どのような遊び活動が発達的に未熟な形態であるのかを日本の幼児について明らかにするとともに、主張性・協調性と社会的な遊び・非社会的な遊びの頻度との関連性も試論的に探索する。

## 方法

**被験者** 茨城県T市内の公立保育所の在籍児37名

なお、面接データに不備があったものが分析から除外されたので、最終的な参加者は33名となった。(内訳：5歳男児7名、女児9名、6歳男児13名、女児4名)

**手続き** 初めに個別面接によって主張性と協調性が測定され、約1カ月後に自由遊び場面における遊び活動の観察が行われた。以下に詳細な手続きを示す。

### (1) 主張性・協調性の測定

**面接状況** 通常の保育時間中に、保育所内の別室において個別面接が実施された。面接では、対人葛藤場面(2話)の絵カード(各2枚からなる)を提示し、自分ならばどう振る舞うかについて質問した。そして、回答の内容から協調性を評定し、反応の様子か

ら主張性を評定した。回答内容はその場で記録用紙に記録したが、反応の様子は、面接場面のビデオ録画に基づいて評定された。

面接には2名の女子大学生と1名の男子大学生があたり、女児に対しては女子学生が交替で面接を行い、男児に対しては男子学生が面接を行った。

**提示刺激** 葛藤場面①：固定遊具をめぐる葛藤(男女共通) 公園で2人の登場人物(一方が被験者であるという設定)がブランコで遊んでいる(シーン1)。そこへ他児がやってきて、自分も遊具を使いたいと主張する(シーン2)。なお、登場人物は全て被験者の性に合わせてある。

葛藤場面②：玩具をめぐる葛藤(男児用) 1人の登場人物(被験者の設定)が保育所の庭でボールを蹴って遊んでいる(シーン1)。そこへ他児がやってきて、自分もボールを使いたいと主張する場面(シーン2)。なお、登場人物は男児である。

葛藤場面③：玩具をめぐる葛藤(女児用) 1人の登場人物(被験者の設定)が保育所の室内で人形で遊んでいる(シーン1)。そこへ他児がやってきて、自分も人形を使いたいと主張する場面(シーン2)。なお、登場人物は女児である。

**発問** 被験者に対して、1話毎にもし自分だったらどうするか(解決方略)を問い、続いてなぜその方略を選んだのか、理由が尋ねられた。

**主張性の測定** Table 1 に示した基準に基づき、被

Table 1 主張性の評定基準

総合評価	5：主張的である 4：やや主張的である 3：普通 2：あまり主張的でない 1：主張的でない
声の大きさ	5：大きいはっきりした声 4：はっきりした声 3：普通に聞き取れる会話 2：小さな声 1：全く答えない/聞き取れない
表情・動作の豊かさ	5：表情や身振りが非常に豊か 4：表情や身振りが豊か 3：表情は普通で身振りは特にな 2：表情が乏しい 1：不安そうな表情
発話量・会話の円滑さ	5：自発的な発話が非常に多い 4：自発的な発話がある 3：質問に答えられ、対話ができる 2：質問になかなか答えられない 1：質問に全く答えない

験者の回答の様子を5件法で評定した。主張性得点には、総合評価の評定値が用いられた。独立した二者による評定値の間の順位相関係数は、 $r = .898$ であった。

**協調性の測定** 被験者の回答に基づき、方略とその理由の組み合わせから場面毎に協調性を評定した。評定の基準はTable 2に示したとおりである。独立した二者による評定値の間の順位相関係数は、場面1については $r = .918$ 、場面2については $r = .828$ であった。

## (2) 社会的遊びの観察

**観察状況** 観察は午前中の自由遊びの時間に行われ、その場で被験者の遊びの形態と内容が記録された。観察は15秒のインターバル(10秒間観察・5秒間で記録)を1単位として行われ、観察者は保育所の室内や庭で、被験者の幼児の遊びを連続1分間(4インターバル)観察した後に、次の子どもを1分間観察するローテーション方式でデータが収集された。1日あたり各被験者につき3分間(12インターバル)のデータを収集することを標準としたが、保育時間等の関係で、全員が同じインターバル数だけ観察されない場合もあった。観察は約1カ月半の間に合計5日間実施され、1人につき最低24インターバルから最高64インターバルのデータが収集された。被験者が観察される順序はその日によってランダムに変えられた。

**観察内容** 観察カテゴリーはRubin(1986)に基づいて作成された。ただし、その基盤となっているParten(1932)の観察カテゴリーは、室内遊びのために作られたものであり、屋外の遊具を用いた身体運動を伴う遊びはカテゴリーに含まれていない。そこで、Roper & Hinde(1978)の観察カテゴリーを参考

に、運動遊びというカテゴリーを新たに設けた。Table 3に本研究で用いられた観察カテゴリーを示す。

なお、観察には面接にあたった3人の他に1名の男子大学院生が加わり、4名がそれぞれ担当の幼児を分担して実施された。観察期間や時間の制約のため

Table 3 遊びの観察カテゴリー

何もしていない行動 (unoccupied behavior)
傍観者の行動 (onlooker behavior)
独人遊び (solitary play) <ul style="list-style-type: none"> <li>• 機能的遊び (functional play)</li> <li>• 構成的遊び (constructive play)</li> <li>• 劇的遊び (dramatic play)</li> <li>• ルールを伴うゲーム (game with rules)</li> <li>• 運動遊び (large play)</li> </ul>
平行遊び (parallel play) <ul style="list-style-type: none"> <li>• 機能的遊び</li> <li>• 構成的遊び</li> <li>• 劇的遊び</li> <li>• ルールを伴うゲーム</li> <li>• 運動遊び</li> </ul>
集団遊び (group play) <ul style="list-style-type: none"> <li>• 機能的遊び</li> <li>• 構成的遊び</li> <li>• 劇的遊び</li> <li>• ルールを伴うゲーム</li> <li>• 運動遊び</li> </ul>
読書 (reading) 会話 (conversation) その他作業など (others)

Table 2 協調性の評定基準

得点	内 容	回 答 例 (その理由)
5	相手の立場(感情)が理解されており、自他の両立を図る	貸してあげる(友だちになりたいから) 後で貸してあげる(さっきから使っていたから)
4	相手の立場が理解されているが、自他の両立までは考慮されていない	貸してあげる(相手がかわいそうだから) 貸してあげる(相手が使いたいから)
3	方略的には相手を尊重するが、相手の気持ちよりも自分の立場が優先される	貸してあげる(自分が優しいから) 貸してあげる(飽きたから)
2	方略的には相手を尊重せず、相手の感情も考慮しない	入れてあげる(ケンカをするといけないから) やだ(知らない子だから)
1	方略は答えるが、理由が不明	貸してあげない(自分が乗りたいから) 貸してあげる(わからない)
0	回答不能	貸してあげない(わからない) わからない(理由なし)

め、本研究では観察カテゴリーに関する二者間の一致率は算出されていない。

## 結果

主張性・協調性に基づいた社会的行動類型の分布を Table 4 に示す。本研究では被験者が少ないため、女兒では主張性・協調性による社会的行動類型に被験者を分類することができなかった。男児も被験者が少ないので、本研究では遊び活動の性差と年齢差の検討を中心とし、社会的行動類型と遊びとの関連性は、男女を込みにしたサンプルで試論的な検討を加えるにとどめる。

1人あたりの観察回数が異なるため、観察された各々の遊び行動を1分あたりの平均頻度に換算し、これが分析の対象とされた。以下ではまず、遊びの性差および発達の特徴を検討し、続いて主張性および協調性と遊び活動との関連性を検討する。

### (1) 性・年齢と遊びとの関連性

各行動カテゴリーを従属変数とし、性×年齢を独立変数とした二要因多変量分散分析が実施されたが、分析にあたって複数のセルで頻度が零となった行動カテゴリーは除かれた。Wilksの $\Lambda$ 基準によって分散分析を実施した結果、性に関する多変量主効果が、 $\Lambda = .095$ ,  $F = 6.81$  ( $df = 14, 10$ )となり、1%水準で有意となった。年齢×性の多変量交互作用については、 $\Lambda = .061$ ,  $F = 10.90$  ( $df = 14, 10$ )となり、0.1%水準の交互作用がみられた。個別変量に関して主効果および交互作用が有意または有意傾向になった行動に関しては、どのセルが効果の原因であるかを検討するために、TukeyのWSD法による多重比較が実施された。

個別変量に関して性差がみられた行動は以下の通りである。

「何もしていない行動」については $F = 4.36$  ( $df = 1, 23$ )で5%水準で有意となり、女兒の方が「何もしていない行動」が多いことが示された。多重比較の結果、5歳女兒と6歳女兒、および5歳女兒と6

歳男児の間に5%水準の有意差が認められた。

「平行-構成的遊び」に関しては、 $F = 32.45$  ( $df = 1, 23$ )で0.1%水準で有意となり、女兒の方が多いことが示された。多重比較の結果、5歳・6歳女兒と5歳・6歳男児の間にそれぞれ5%水準の有意差が認められた。

「集団-ルールを伴うゲーム」に関しては、 $F = 11.78$  ( $df = 1, 23$ )で1%水準で有意となり、男児の方が多いことが示された。また、この行動は交互作用についても $F = 14.24$ で0.1%水準で有意となった。多重比較の結果、5歳男児と5歳女兒の間に1%水準の有意差が、また5歳男児と6歳男児の間に5%水準の有意差が認められた。

年齢の主効果が有意になった行動は以下の通りである。

まず「傍観者の行動」に関しては、 $F = 4.99$  ( $df = 1, 23$ )で5%水準で有意となり、5歳児の方が多いことが示された。多重比較の結果、5歳女兒と6歳男児、および5歳女兒と6歳女兒の間にそれぞれ5%水準の有意差が認められた。

「独り-運動遊び」に関しては、 $F = 3.82$  ( $df = 1, 23$ )で10%水準の有意傾向となり、6歳児の方が高い可能性が示唆された。多重比較の結果は、いずれのセル間にも有意差は見出されなかった。

「集団-構成的遊び」に関しては、 $F = 5.30$  ( $df = 1, 23$ )で5%水準で有意となり、5歳児の方が多いことが示された。多重比較の結果、各セル間に有意差は見出されなかった。

「集団-劇的遊び」に関しては $F = 20.23$  ( $df = 1, 23$ )で0.1%水準で有意となり、5歳児の方が6歳児よりも多いことが示された。多重比較の結果、5歳男児・女兒と6歳男児・女兒の間にそれぞれ5%水準の有意差が認められた。

「集団-運動遊び」に関しては、 $F = 4.51$  ( $df = 1, 23$ )で5%水準で有意となり、6歳児の方が5歳児よりも多いことが示された。多重比較の結果、6歳男児と5歳男児、6歳男児と5歳女兒、および6歳女兒と5歳女兒の間に10%水準の差が認められた。

主効果または交互作用が有意(傾向)となった活動の頻度を Fig. 1 および Fig. 2 に示す。

### (2) 社会的行動類型と遊びとの関連性

男女を込みにした全サンプルの遊び活動に関して、遊び活動の頻度を従属変数に、主張性(2水準)×協調性(2水準)を独立変数とする多変量分散分析が実施された。分析にあたっては、複数のセルで頻度が零になった行動カテゴリーは除外された。

Wilksの $\Lambda$ 規準によって分析を行った結果、多変量主効果および交互作用はいずれも有意とならな

Table 4 社会的行動類型の分布

	男 児		女 児	
	協 調 性			
	高	低	高	低
主高 張	4	5	6	6
性低	3	8	0	1

かった(主張性について  $\Lambda = .609$ ,  $F=0.56$ , 協調性について  $\Lambda = .464$ ,  $F=1.01$ , 交互作用について  $\Lambda = .439$ ,  $F=1.12$ ,  $df=16, 14$ ). さらに, 主張性についてはどの行動に関しても個別変量の主効果, 交互作用ともみられなかった。

協調性の個別変量主効果は, 「独り-機能的遊び」に関して  $F=2.93$  ( $df=1, 29$ ) で有意傾向となり, 協調性の低い子どもの方が活動の頻度が多い傾向がみられた。また, 「集団-機能的遊び」に関して  $F=5.39$  ( $df=1, 29$ ) で5%水準で有意となり, 協調性の高い子どもの方が活動の頻度が多いことが示された。

個別変量交互作用は, 「平行-機能的遊び」に関して  $F=5.28$  ( $df=1, 29$ ) で5%水準で有意となり, 「集団-機能的遊び」に関して  $F=3.20$ , 「集団-ルールを伴うゲーム」に関して  $F=2.91$  (いずれも

$df=1, 29$ ) で有意傾向となった。

さらに, 個別変量に関して主効果または交互作用のみられた活動については, どのセルが効果を生み出しているのかを調べるために, Tukey の WSD 法による多重比較が行われた。その結果, 「集団-機能的遊び」について従属型と消極型の間に10%水準の差が認められた。それ以外の活動については, 有意な群間差はみられなかった。

### 考 察

本研究では, Rubin(1986)の観察カテゴリーに基づいて, 遊び活動の発達の变化と性差の検討が行われた。6歳女児のサンプルが少なかったために, 性差および女児の遊びの発達の発達の特徴については, この年齢の女児全ての特徴を反映しているとはいえない

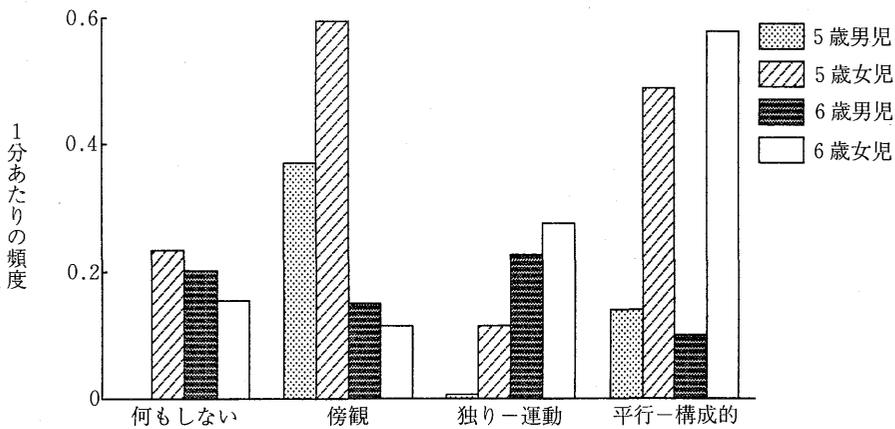


Fig. 1 遊びのパターン(1)

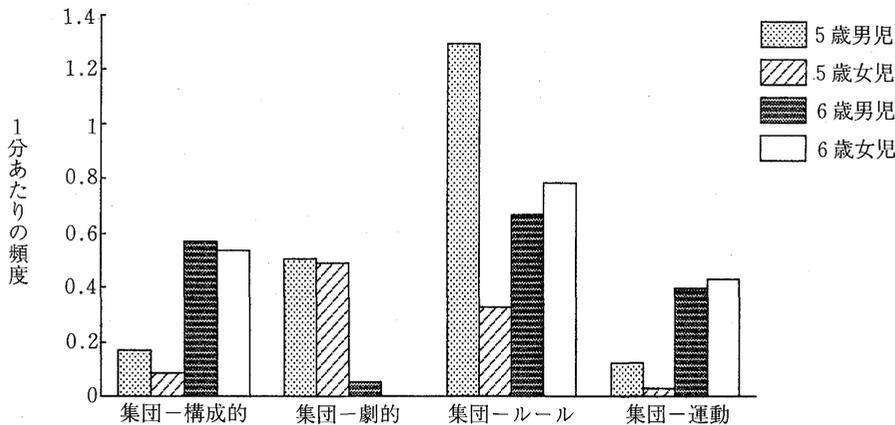


Fig. 2 遊びのパターン(2)

が、本研究でみられた特徴について以下で詳細に考察する。

まず「傍観者の行動」に年齢差がみられる。「傍観者の行動」は、Parten(1932)の分類では社会的参加度が低い行動として扱われているが、本研究でも5歳児により多くみられている。他者の活動を眺めるという行動は、他者に対する興味はあるが、自発的に社会参加ができない状態を表している。したがって、社会的発達からみるとより未熟な行動であるといえよう。傍観者の行動の多さは、仲間集団に参加するエントリースキルの欠如した状態であり、方略的な知識あるいは主張性が低い子どもにみられるのではないかと考えられる。したがって、今後より大きなサンプルで社会的行動類型と遊び活動の関連性を検討する際には、傍観者の行動の頻度は社会的発達の程度を示す一つの指標となるであろう。

「独りー運動遊び」の頻度は6歳児の方が多かったが、独り遊びに限らず、全体的な傾向として6歳児は運動遊びが多かった。観察を実施した時期には竹馬と縄跳びが子どもたちの間で流行していたが、どちらも運動技能の習熟が必要で、達成感のある活動である。したがって、自発的に一つの活動に取り組んで、技能的な向上をめざすこうした遊びは、無目的に反復動作に興じる機能的遊びとは異なり、たとえ独り遊びであっても子どもの心身の発達に望ましい活動であると思われる。したがって、運動遊びの頻度が高いことは、むしろ発達のみにて当然のことであろう。

「集団ー構成的遊び」にも年齢差がみられたが、この活動は6歳児の方が頻度が多かった。ブロックを組んで何かを作ったり、一緒に絵を描くなど、協同で行われる創作活動は、知的にも社会的にも高次の活動であるので、この遊びに年齢差がみられるということは、社会的発達を反映したものといえよう。5歳男児は室内でブロック遊びをしていても、ときどき一緒に作ったり、作ったもので闘いごっこに発展することはあるが、全体としては平行遊びの状態が多かったように思われる。5歳女児は、並んで絵を描いていても、相互のインタラクションはあまりなく、これもやはり平行遊びが中心であった。構成的な遊びを個人の枠組みだけではなく、相互に共有できるかどうかという観点は、社会的発達の指標として使用できるであろう。

「集団ー劇的遊び」は5歳児に多くみられる。5歳男児に多くみられたのは、2～3人で組になって行う闘いごっこであった。実際に闘うのではなく、テレビの登場人物のヒーローになった振りをして互いに向かい合ってポーズを作るといった単純な劇的

遊びが中心であった。女児では、平行遊びから集団遊びで、動物ごっこが多かった。たとえば、誰か1人の女児が猫の鳴き真似をすると、他児がそれを真似て数名で猫ごっこになる、などである。Eckerman, Davis & Didow(1989)によれば、こうした協同行動は既に2歳頃から獲得されており、中野(1988)の3歳児の観察記録でも、平行遊びから協同遊びに発展する典型的なパターンである。したがって、こうした単に他児の真似をすることで成り立っている集団遊びは、協同遊びを成立させ、発展させるという社会的スキルの面からみれば低い段階に留まっているものといえよう。もしも振り遊びの中に明確なストーリーと役割分担が生まれれば、これはParten(1932)のいう組織化された遊びに当てはまるが、少なくとも本研究では、5歳児に組織化された遊びはみられなかった。

「集団ー運動遊び」は6歳児に多くみられる。この点については先にも触れたように、竹馬・縄跳びが活動の中心であった。特に、仲間と会話をしながら竹馬に乗っているケースが多く、こうした活動は単なる会話ではないため、「集団ー運動遊び」に分類されることになった。独りで練習をする段階から、次第に運動技能に習熟し、活動に余裕ができると、他児と一緒に遊びを楽しむ形態へと変化してくる。発達のみにみれば、「集団ールールを伴うゲーム」が最も高次に位置する活動であるが、6歳児の段階では知的にも社会的にもそこまで到達しておらず、自発的にルールを運営できない子どももいるので、「集団ー運動遊び」を達成できることがこの年齢で望まれる社会的な発達課題であるといえるかも知れない。その意味では、他児と会話をしたり遊びの交渉をするための社会的スキルだけではなく、運動技能が仲間関係を構築する上で重要な役割を担ってくることも否めない(Hops, 1983)。

「集団ールールを伴うゲーム」では、交互作用が有意になり、5歳男児の頻度が高くなっている。しかし、これは真の意味でのルールを伴うゲームではなく、集団で単に追いかけて、あるいはホールを走っている状態をこのカテゴリーに分類したために、交互作用が生じたものである。予備観察の時点で観察者間の打ち合わせを行った際に、数人で走り回っている活動をどのカテゴリーに分類するかで討論した結果、ルールを伴うゲームに分類することになったのであるが、実際に観察を行ってみた結果、この活動をルールを伴うゲームと呼ぶのは難しいという印象を受けた。鬼ごっこなどの真にルールを伴う遊びが自発的に運営できるのは、認知発達のレベルからいって7～8歳頃である。したがって、単に

数人で走り回って歓声をあげている状態は、むしろ「集団一機能的遊び」に分類すべきであったと判断される。「集団一機能的遊び」として観察されていたならば、5歳男児の「集団ルールを伴うゲーム」の頻度は減り、おそらくルールを伴うゲームについても年齢の主効果がみられたのではないかと考えられる。このカテゴリーの分類基準については、今後の観察において十分留意されるべき点といえよう。

なお、遊びの性差については、「何もしていない行動」と「平行一構成的遊び」に関してみられ、いずれの活動も女児の方が多かった。「何もしていない行動」に関しては、6歳児では男児の方が若干頻度が多いことから、5歳男児に全くみられなかったために性の主効果が有意になったものと推測される。「何もしていない行動」は、ある程度の時間観察を続けていけば、必ず生じるものなので、5歳男児に全くみられなかったことがむしろ特異的であるといえる。

むしろFig. 1に示されたように、顕著な性差は「平行一構成的遊び」にみられる。女児の「平行一構成的遊び」の大部分は机に向かった描画で、これは1つの机に2～3人が座って絵を描いているために生じた現象である。男児の構成的遊びはほとんどがブロック制作の動的な活動であり、他児との距離や接触の有無といった状況次第で「独り一構成的」「平行一構成的」「集団一構成的」のどれにでもなり得る活動である。これに対して、女児の描画は静的な活動であり、ほとんどが「平行一構成的遊び」の状態に留まっている。同じ構成的遊びでも、描画とブロック制作という内容、すなわち遊びに対する選好の違いによって、結果的に社会的参加度に違いが生じてくるのである。

次に、男女を込みにした全サンプルの傾向から、二つの特性と社会的行動類型による遊び活動にみられる特徴を考察する。社会的行動類型に関しては、小林(1993)に分類とその名称が述べられている。

本研究では、協調性について二つの活動で主効果が有意または有意傾向となった。「独り一機能的遊び」では協調性の低い子どもの方が活動の頻度が高く、「集団一機能的遊び」では協調性の高い子どもの方が活動頻度が高かった。これは、社会的な動機づけと、適切な社会的知識を持っている協調性の高い子どもの方が、集団での遊びが多く、独り遊びが少ないことを示しており、協調性と仲間関係の関連性を示唆する有力な証拠となっている。

「集団一機能的遊び」に関しては、多重比較の結果、従属型と消極型との間に10%水準の差が認められた。多重比較では有意差がみられなかったが、「平

行一機能的遊び」には交互作用がみられており、やはり従属型の子どもが最も活動頻度が高くなっている。機能的遊びは本来、それほど高度な技能を必要とするものではなく、「集団一機能的遊び」は追いかけっこや、数人で並んで(あるいは順番に)高いところから飛び降りるなどの、単純な反復動作である。したがって、集団遊びの中では特にエンタリー方略は必要とせず、対人葛藤もほとんど生じない。こうした遊びであれば、従属型の子どもも単に他児の真似をしていればよい。それが平行遊びおよび集団遊びの中で機能的遊びの頻度が高くなった原因であろう。従属型の子どもが、他児に対するフォロワーとして集団遊びに参加できるのはこの形態の遊びなのである。

以上の結果を総合すると、Rubin(1986)の用いた遊びの観察カテゴリーは、社会的発達の観点からは有効な測度であり、社会的行動類型との関連からみても、子どもの有する社会的スキルの結果、どのような仲間関係が生じるかを推察する手がかりになるものと判断される。したがって、遊びの選好に性差があることを考慮すると、今後はより大きなサンプルを用いて、男女それぞれについて社会的行動類型と遊び活動の関連性を検討することが重要であると思われる。

## 要 約

これまでの研究によれば、独り遊びは年齢と共に減少し、平行遊びや集団遊びは年齢と共に増加することが示されてきた。したがって、子どもの社会的発達は遊び活動の観察によって評価され得る。本研究では、幼児の自由遊び行動が保育所の教室や庭で観察され、年齢差と性差が検討された。子どもの行動は、Rubin(1986)によって開発された遊び観察尺度を用いて記録された。この尺度は、社会的および認知発達理論に基づいて作成されたものである。結果によれば、6歳児は集団での運動遊び、集団での構成的遊びを好んでいた。傍観者の行動は、6歳児よりも5歳児に多く観察された。さらに、平行遊びの頻度において性差が見出された(女児の方が男児よりも多く平行遊びに従事していた)。以上の結果から、遊び観察尺度が子どもの社会的発達を評価するために有効であるといえる。

## 付 記

本研究の実施に際し、観察と面接を快く承諾して下さい。つくば市立竹園保育所の先生方と子どもたち

ち、ならびにデータ収集に協力して下さった明里紅弥・川田真由美・小谷泰典(筑波大学人間学類)の諸君に感謝します。

### 引用文献

- Hops, H. 1983 Children's social competence and skills: Current research practices and future directions. *Behavior Therapy*, **14**, 3-18
- Gottman, J.M. 1977 Toward definition of social isolation in children. *Child Development*, **48**, 513-517
- 小林 真 1990 子どもの社会的スキルをめぐって—遊びと対人行動の発達— 筑波大学幼児相談学研究, **2**, 61-68
- 小林 真 1992 幼児の主張性と協調性について 日本教育心理学会第34回総会発表論文集
- 小林 真 1993 協同作業場面における幼児の社会的相互作用 日本発達心理学会第4回大会発表論文集
- Ladd, G.W., Price, J.M. & Hart, C.H. 1988 Predicting preschooler's peer status from their behaviors. *Child Development*, **59**, 986-992
- Roper, R & Hinde, R.A. 1978 Social behavior in play group: Consistency and complexity. *Child Development*, **49**, 570-579
- Rubin, K.H. 1982 Nonsocial Play: Necessarily evil? *Child Development*, **53**, 651-657
- Rubin, K.H. 1986 Play, peer interaction, and social development. In Gottfried, A.W. & Brown, C.C. (Eds.) *Play interaction —The contribution of play materials and parental involvement to children's development—*. Lexington: Lexington Books.
- Rubin, K.H., Maioni, T.L. & Hornung, M. 1976 Free play behaviors in middle- and lower class children: Piaget and Parten revisited. *Child Development*, **47**, 414-419
- Rubin, K.H., Watson, K.S. & Jambor, T.W. 1978 Free play behaviors in preschool and kindergarten children. *Child Development*, **49**, 634-636
- Zheng, S. & Colombo, J. 1988 Sibling configuration and gender differences in preschool social participation. *The Journal of Genetic Psychology*, **150**, 45-50

—1993. 9 .30受稿—